



校長室だより～湘南の空～

第2号

令和4年1月11日

年が明け、3年生は全力を傾け勉強していることと思う。湘南高校で培ってきた力を信じてほしい。全員が第一志望校に進学することを心より願っている。

異文化理解

生徒の皆さんは、将来何らかの形で世界を変える人物になる。その時に大切なことは、異文化を背景とする他者を理解し、互いを尊重する関係を築くことだ。皆さんは日本で生活し、教育を受け日本の文化や習慣を背景に生きており、世界は皆さんのこのバックグラウンドに価値を見る。

例えば、古文や漢文を読むことは、能動的に学びさえすれば、奥深く、昔の人と直接つながることができ、この上ない喜びとなる。グローバルに活躍する人にとって、文化への理解と発信が不可欠で、そうした意味から、早い段階から古文、漢文を本格的に学んでいくべきと考える。私の専門教科は数学だが、古文や漢文をたくさん読んだことで、新たな視点を得、人生が豊かになったと実感している。古典を学ぶにあたり、始めは覚えることが多くて大変かもしれないが、乗り越えれば美しい景色が広がっている。

自分の背景である文化を深く理解するからこそ、異文化を背景とする他者を理解し、受け入れることができ、互いを尊重する関係を築くことができる。

何を今頑張って、何を後で頑張って何を選び取っていくか

昨年の12月、校長室の書棚を整理していたら、小説家辻堂ゆめさん（86回）のデビュー作「いなくなった私へ」を偶然見つけた。2015年3月20日付のサイン入りである。当時東京大学4年生だった辻堂さんは「第13回『このミステリーがすごい！』大賞」優秀賞を受賞して堂々デビューを果たしていた。早速読んでみると、規格外の創造力と筆力を駆使して編み上げられた見事な作品だ。

辻堂さんは本校放送部制作「100周年記念映像」の中で、湘南高校について次のように述べている。「たくさんの選択肢が与えられている中で、自分で何を今頑張って、何を後で頑張って何を選び取っていくかというのを自分の頭で考えてしっかり選べるというところが（湘南高校の）良さだと思います。」

適切に優先順位をつけて行動することは容易ではなく、その人のアイデンティティそのものと言ってよい。

生徒の皆さんには、高い理念・目標を掲げ、突き進む中で見えてくる課題を

優先してほしい。

究極の目的をどこに据えたらいいかを自分でつかむ

ミッシャ・マイスキー（1948年～）というラトビア（旧ソビエト連邦）出身の世界的チェリストがいる。1986年から毎年のように来日し、ある時期、茅ヶ崎市民文化会館でもリサイタルを開くようになった。客を大切にするアーティストで何度もアンコールに応え、お気に入りの三宅一生デザインの衣装を汗で濡らす熱演だ。

若くして国際コンクール等で頭角を現していたミッシャ・マイスキーは1970年に信じられないような些細な理由で逮捕され、ゴーリキー郊外の強制収容所で18ヶ月間の生活を強いられる。1972年に国外移住を認められると、渡米を経て、1973年、祖国とも言うべきイスラエルに向かう機内で「真っ暗な中に建物の明かりがたくさん点在している。ああ、なんて幸せな明かりなのだろう。あの光の中には自由がある。人々の暮らしがある。何物にも束縛されず、何でも話せ、自由に行動できる生活がある。今、私はその光の中へ舞い降りて行くのだ。」真摯・謙虚・情熱を兼ね備えたミッシャ・マイスキーらしい思いである。

1974年、ミッシャ・マイスキーは巨匠グレゴール・ピアティゴルスキーに師事。「(師ピアティゴルスキーは) さまざまな作品の解釈を勉強していく中で、究極の目的は何か、ということを確認に頭の中に描かせてくれる。究極の目的をどこに据えたらいいかを自分でつかむように……。そこへたどり着くのにどうしたらよいかを考えるのではなく、自分がどこへ行こうとしているのかを見つけるように導いてくれた。」ミッシャ・マイスキーは「ピアティゴルスキーの音色に対するこだわり、アプローチ、自然さを大切にするその心を受け継ぐよう努力した。」(ミッシャ・マイスキー「わが真実」伊熊よし子著より)

ミッシャ・マイスキーは、師から多くを学ぶのだが、技術はもちろん、「自分がどこへ行こうとしているのかを見つけるように導いてくれた」ことが最も大きかった。これにより、日々の活動に意味を持たせることができたのではなからうか。

余談だが、私はミッシャ・マイスキーのファンで、四半世紀前の茅ヶ崎市民文化会館でのリサイタル後、娘とサインをもらったほどである。